角川文庫
—1789—

平家物語

上巻

佐藤謙三校註

角川書店

昭和三十四年五月十日　初版發行
昭和四十一年六月十日　九版發行

角川文庫

平家物語　上卷
全二冊

校註者　佐藤謙三
發行者　角川源義
印刷者　東京都豐島區高田南町一ノ六四　中内あき子
發行所　東京都千代田區富士見町二ノ七　株式會社　角川書店
振替東京一九五二〇八
電話東京(265)七二一(大代表)

定價百四拾圓

Printed in Japan　中光印刷・本間製本

落丁・亂丁本はお取替へ致します

平家物語

上卷

佐藤謙三校註

角川文庫

1789

例　言

一、本文は主として流布本の一つ、寛文十二年（一六七二）刊の平假名整版本により、同じ系統の元和七年（一六二一）の刊本によつた野村宗朔氏の『昭和校訂平家物語』（昭和十一年、武藏野書院刊）と、萬治二年（一六五九）の刊本によつた石村貞吉氏の『新註平家物語』（昭和六年、修文館刊）とを參照した。寛文の版本には卷末に「此平家物語一方檢校衆以吟味令開板之者也」とし、「寛文十二壬子年六月吉日、堺屋勝兵衛、美濃田新左衛門、開板」とある。

二、本文の訓と註とについては、梅澤和軒氏の『評釋平家物語』（大正十二年、帝國教育研究會刊）、御橋悳言（とくげん）氏の『平家物語略解』（昭和四年、寶文館刊。本文は東京美術學校所藏の古活字本という。覺一本か。本書の略號「略解」）、前記野村・石村氏の本、山田孝雄氏の『平家物語』（昭和八年、寶文館刊）を參考とした。なお、註については、新しい物として、『日本古典全書』（朝日新聞社刊）の冨倉德次郎氏の本や、『新註國文學叢書』（講談社刊）の高橋貞一氏の本を參照した。

三、平家物語には、本によつて本文にかなりの異同がある。それで本書の註には、その異同の注意すべき物を記入した。紙面の關係で十分とは言えない註記ではあるが、讀者の參考となれば幸いである。今、角川版日本古典鑑賞講座『平家物語』の參考文獻（後藤丹治氏稿）の例にならつて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本書に取り上げた平家の諸本の名を擧げておく。

(イ)流布本（この中の一つが本書の底本）

この本の類本ともいうべき物に、前記山田氏の寶文館刊の本がある。同じ山田氏の岩波文庫本（昭和四年刊）も本文は同じ。山田氏はこれを「覺一本の別本ともいふべきもの」とされている。本書略號「岩」。眞字本と呼ばれる熱田本（一四七四頃寫）もこの系統。本書略號「眞」。

(ロ)八坂本

流布本が一方流の琵琶法師の語り本（覺一本の系統）であるのに對して、これは八坂流の語り本。この本は灌頂の卷を立てない。國民文庫（明治四十四年、國民文庫刊行會刊）所收。本書略號「八」。

(ハ)長門本

二十卷本。下關市（昔は長門國）の赤間の宮、その他所藏。下の二本と共に內容にかなりの增補がある。明治三十九年、國書刊行會刊。本書略號「長」。

(ニ)延慶本

花園天皇の延慶年間に書寫したとの奧書がある。六卷十二册。昭和十年、改造社刊。本書略號「延」。

(ホ)源平盛衰記

これも「平家」の異本の一つ。四十八卷。そのよい活版本とされているのは、通俗日本全史

（大正元年、早稲田大學出版部刊）所收の本。本書略號「盛」。

なお、以上のほかに、後藤氏は、前記梅澤和軒氏の評釋を「平家正節」を底本としたところに特色があると紹介された。

四、脚註には、必要に應じて當時の史料を引用しておいた。この場合、野宮定基（正德元年―一七一一沒、四三歳）の『平家物語考證』（國文註釋全書所收。本書略號「考證」）を參考とした所がある。その史料は大體次のような物である。

吾妻鏡

東鑑。治承四年（一一八〇）から文永三年（一二六六）までの鎌倉幕府の記錄。國史大系・岩波文庫所收。

玉葉

玉海とも。九條兼實の日記。長寛二年（一一六四）から正治二年（一二〇〇）に至る。國書刊行會叢書所收。

山槐記

中山忠親の日記。仁平元年（一一五一）から建久五年（一一九四）に至る。史料大成所收。

吉記

吉田經房の日記。承安二年（一一七二）から文治四年（一一八八）に至る。史料大成所收。

百錬抄

編者未詳。冷泉天皇から後深草天皇に至る編年體の記錄。國史大系所收。

目次

例言　一

卷第一

一　祇園精舍の事　一七
二　殿上の闇討の事　一八
三　鱸の事　二一
　付　禿童　二三
四　我身の榮花の事　二五
五　妓王の事　二七
六　二代の后の事　三八
七　額打論の事　四一
八　清水炎上の事　四三
九　殿下の乘合の事　四六

一〇　鹿の谷の事　四九
一一　鵜川合戰の事　五三
一二　願立の事　五七
一三　御輿振の事　六一
一四　内裏炎上の事　六四

卷第二

一　座主流の事　六八
　付　一行阿闍梨の事　六四
二　西光が斬られの事　七五
三　小教訓の事　八一
四　少將乞請の事　八八
五　教訓の事　九三
　付　烽火の事　九七
六　新大納言の流されの事　一〇三
七　阿古屋の松の事　一〇四
八　新大納言の死去の事　一〇八

付 德大寺嚴島詣での事 一一一
九 山門滅亡の事 一一四
付 善光寺炎上の事 一一七
一〇 康賴祝の事 一一八
付 卒都婆流しの事 一二一
一一 蘇武が事 一二四

卷第三

一 赦文の事 一二七
二 足摺の事 一三〇
三 御產の卷の事 一三四
付 公卿揃への事 一三七
四 大塔建立の事 一三九
五 賴豪の事 一四一
六 少將都還りの事 一四三
七 有王が島下りの事 一四七
八 つじかぜの事 一五四

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

九　醫師問答の事　一五五
一〇　無文の沙汰の事　一五九
付　燈籠の事　一六一
金渡しの事　一六二
一一　法印問答の事　一六三
一二　大臣流罪の事　一六七
付　行隆の沙汰の事　一七〇
一三　法皇御遷幸の事　一七三
一四　城南の離宮の事　一七六

卷第四

一　嚴島御幸の事　一七九
付　還御の事　一八三
二　源氏揃への事　一八六
三　鼬の沙汰の事　一九〇
四　信連合戰の事　一九一
付　高倉の宮園城寺へ入御の事　一九六

五 競が事 一九七
六 山門への牒狀の事 二〇一
七 南都牒狀の事 二〇三
八 南都返牒の事 二〇五
九 大衆揃への事 二〇七
一〇 橋合戰の事 二一一
一一 宮の御最期の事 二一六
一二 若宮御出家の事 二二〇
一三 鵺の事 二二四
一四 三井寺炎上の事 二二八

卷第五

一 都遷の事 付 新都の事 二三〇
二 月見の事 二三四
三 物怪の事 二三六
四 大庭が早馬の事 二三八

五 朝敵揃への事 二四一
六 咸陽宮の事 二四四
七 文覺の荒行の事 二四九
八 勸進帳の事 二五一
九 文覺流されの事 二五三
一〇 伊豆院宣の事 二五七
一一 富士川の事 二六〇
一二 五節の沙汰の事 二六六
付 都還の事 二六九
一三 奈良炎上の事 二七〇

卷第六

一 新院崩御の事 二七五
二 紅葉の事 二七七
付 葵の前の事 二八〇
三 小督の事 二八一
四 廻文の事 二八八

付　飛脚到來の事　二九〇
五　入道逝去の事　二九二
付　經の島の事　二九六
六　慈心坊の事　二九七
七　祇園女御の事　三〇一
八　洲の股合戰の事　三〇四
付　しはがれ聲の事　三〇六
九　横田河原合戰の事　三〇八

卷第七

一　北國下向の事　三一三
二　竹生島詣での事　三一五
三　火燧合戰の事　三一七
四　木曾の願書の事　三一九
五　倶利伽羅落しの事　三二三
六　篠原合戰の事　三二五
七　實盛最後の事　三二八

八　玄昉の事　三三一
九　木曾山門牒狀の事　三三三
一〇　山門返牒の事　三三六
一一　平家山門への連署の事　三三八
一二　主上の都落の事　三四〇
一三　維盛都落の事　三四四
一四　聖主臨幸の事　三四七
一五　忠度都落の事　三四九
一六　經正の都落の事　三五一
一七　青山の沙汰の事　三五三
一八　一門の都落の事　三五四
一九　福原落の事　三五九

平家物語

上卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com